
女の子の俺は俺で！？

御幣 橋月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女の子の俺は俺で!?

【Nコード】

N0629BA

【作者名】

御幣 橘月

【あらすじ】

俺は『宮永 優』（ミヤナガ ユウ）。

ある日、俺は新人類へと進化した！

……あ、いや新人類と言ってもニューハーフとかじゃないんで！。別にこれといったスーパー主人公補正的な特殊能力とかもないんで！。

いや……まあ朝起きたら女の子になってたってことぐらいかな？

……えっ？ 充分特殊だった？

ちよっ！ やめて／＼！ 恥ずかしいから誉めないで！

そんなこんなで幕を開けた優の波乱の日々はこれからどうなるのか？

お茶でも飲みながらまったりと見守ってやってください。

プロローグ『目覚めると……』（前書き）

この物語はフィクションです。

実在する、人物、団体、名称には一切関係ありません。

又、誤字、脱字を発見していただけたら、報告していただけると嬉しいですよ。

プロローグ『目覚めると……』

朝

ジリリリリ。

けたたましい目覚まし時計の音と共に彼、『宮永 優』（ミヤナガ ユウ）の新たな1日が始まる。

「……ふあー……もう朝かー」

寝ぼけ眼で枕元に置かれた目覚まし時計を止める。

「って！ もうこんな時間じゃん！」

時計の針はきっかり午前8時を指していた。

「くっそー！ 入学式でいきなり遅刻なんてごめんだ！」

優はベットから飛び起きて、急いで支度を始めようと、立ち上がったが……。

「うわっ　　いてて……」

無意識に『身体の違和感』を感じ、バランスを崩し、ベットから転げ落ちてしまう。再度立ち上がるうとするが、何故かバランスがとれず、傍目から見るとその様子はまるで、生まれたての子馬が立ち上がるうと、必死になっているように見えた事だろう。

「　　なにこれ！？　ど、どうなってるの？」

そう。その優の視線の先には有り得ない物が、……男の子の優には有り得ない物が確かに有った。

遡ること4時間前

優の部屋には怪しい2つの人影があった。コソコソと忍び足で動くその人影は部屋の主に悟られまいと、押し殺した声でひそひそ話をしていた。

「……き、緊張するよママミー！」

「……全く。アナタが緊張してどうするのよ！」

「だ、だって……」

「もうここまで来たのだから、ヤル時はやっちゃいなさい！ アナタそれでも男？」

「わかったよ！ これでも僕も男の端くれだからね！ ヤルとなったらやっちゃうよ！」

「それでこそアナタ。流石私のダーリンね」

「……けど今更ながらコレって優君本人に了解取らなくていいのかな？」

「いいのいいの。言ったら絶対にこの子嫌がるでしょう？ それに私達の子供なんだから何やっても平気よ」

「……ははは……相変わらずママミーは手厳しいね。それでこそママミー。その手厳しさ堪らないよー！」

「はいはい。……ほらちゃっちゃとやっちゃいなさい！」

そんな会話をやっている声の主は『宮永 聡』（ミヤナガ サトシ）と『宮永 要』（ミヤナガ カナメ）。優の両親である。

そして何故、両親が声を押し殺してひそひそ話をしているのかと言つと、2人のその手に持たれた怪しい物体に理由が有つた。

試験管に入つた液体の“ソレ”はボコボコと音を立てて泡立ち、色は紫色という、毒薬にも見えるものだった。

「遂に僕達夫婦の研究の成果が実るんだね！」

「ええ。さあその試験薬を優に注射しなさい」

「フウツハツハツハー！ 我こそは狂喜のマツツッドサエンティスト！」

「ダーリン！ 大声出さないの！」

「え？ こういうのいらないうて？ って痛い痛い！ 痛いよママ！ ー！ 注射器をお尻に射さないで！ アーッ！」

器用に小声で悲鳴をあげる聡であった。

試験管から注射器へと移される“ソレ”は不気味な紫色の煙を上げる、試験薬とやらだった。

「い、いくよママミー！」

「ええ」

緊張と期待の入り交じつた興奮を隠せぬ聡が、注射器を『ブスツ』と優の腕へと射し、紫色の液体が優の身体へと、吸い込まれるように入っていた……。

そして現在

「……あつ！ そつかそつか！ 俺はまだ夢を見ているのか！」

頭に電球マークと「ピンポン」という効果音が付きそうな程に見事に閃いた？（所詮現実逃避）優はなんとか立ち上がり、気にせず顔を洗うために1階の洗面所へと向かう（優の部屋は2階）。

その洗面所へと向かう途中も終始足元が覚束ない千鳥足で歩きつつ、階段へと辿り着く。手すりを掴みながら慎重に慎重に1歩ずつ階段を降りていくが……。

「こけっ！」

鶏の鳴き声の様な悲鳴（？）と共に転がり落ちていく優。

その中で重要な事に気が付く。……そう。男なら誰でもわかるであろう。恐怖を感じた時に縮み込む“男の子のシンボル”が無くなっている事に。

その時の優の顔といったら、階段から落下する恐怖よりも、“男の子のシンボル”が無いことに気が付いて、奇々怪々とした表情をしつつ落下していったのであった。

「……いたたた……全くなんなんだよ！ 夢なんだから痛いのかおかしいだろ！ ふざけるなよ階段！」

……つと余りに“男の子のシンボル”が無くなっている事に動揺したのか、意味不明な八つ当たりをしながら、未だに「これは全部夢なんだ！」と現実逃避をしながら洗面所へとやっとの思いで辿り

着く。

「……つたく、なんなんだよ本当に！ 今日で俺死ぬんじゃ……」
つと頭をポリポリと掻きながら鏡を見る。

「……えっ？」

優が固まる。

「……はっ？」

瞬きをたっぷりとしてから眼をゴシゴシと拭い、小首を傾げる。

「……？」

だが鏡に映る“美少女”も同じように小首を傾げるだけ。（当たり前である）

「えーっと……初めまして？」

ペコリとお辞儀をする優に“美少女”もペコリとお辞儀をする。
（いや、だから当たり前だからね）

「……き、今日はいいいお天気ですね？」

パニックのあまり、天気の話をし始める優。……だが洗面所から外は見えないうえに、今日は生憎の曇天である。

「あ、いきなりすみません。俺の名前は宮永 優って言います……」

って……ハッ！」

そう。ここに来てやっと自分がどうなっているのか、気が付いた優であった。(いや、だから現実逃避だって)

「そういえば俺って女の子だったんだっけ……… ってそんな訳あるかっ！」

こいつノリノリである。

「まあ女の子になったのは今は遅刻しそうだから一先ず横に置いておくとして………」

こいつなかなか大物である。

「よしっ！ 気合い一発！ 洗顔しちやいますか！」

何事も無かったかのようにそそくさと洗顔を始める優。なんと神経が図太いことか……。

「ふーっ。やっと目が覚めてきた………うわっもう10分じゃんヤバい！」

洗顔後、時間を確認するために壁に掛けられた時計をチラッと見る。すると時間は既に8時10分となっていた。学園の登校時間は8時30分迄と決められていた為、その後は遅刻扱いになってしまっ。

「まずい………早く着替えなきゃ！」

だいぶバランスも取れるようになったのか、躓きそうになりながらも、なんとか階段を駆け上がり自室へと向かう。

「えーっと制服はクローゼットの中だから……あれ？ そういえば制服はどうすればいいんだ？」

そんな疑問と共にクローゼットを開くとそこには真新しい制服が掛かっていた。

「……なんだこれっ!？」

そう。なんと掛かっていたのは女子生徒用の制服だった。

「昨日は確かにちゃんと俺の制服が掛かってたよな……?」 そんな事を思いつつ、制服を観察していた時にふと、その制服の首もとのリボンに何かのメモが付いていることに気が付く。

「まったく……どうせ姉貴かなんかのイタズラなんだろ……」

優の姉、『宮永 凜』（ミヤナガ リン）。凜は優の姉であり、事あるごとに優に対してイタズラを仕掛けてくる事がある。

凜曰く「私は優君の事が好きなのだ！ 取って食べたいくらい好きなのだ！」と、これまた冗談なのか、本気で言っているのかわからない怪しい発言をしている。

今までに凜には様々なイタズラをされてきて、優は凜に対して常に警戒するようにしていた。

……そんな警戒心を嘲笑われたようで、悔しがりながら周囲を警戒しつつ、メモを手取る優。

「えーっと……なになに……優君が眠っている隙に……」

そこには驚愕の事実が書かれていた。

それは

「優君が眠っている隙に、試験薬の実験体になってもらったんだけど失敗しちゃった。てへっ！ それで優君は女の子になっちゃったんだ。お父さんは優秀だから失敗に備えて女の子の方の制服も密かに買っておいただ！ 流石お父さんだろう？ お茶目なお父さんより」

「えっ？……………なんだって」

色々ツツコミどころが満載だったが、一先ず状況を整理しようとして落ち着こうとしたが、今更になって自分が“完全無欠の女の子”になってしまったことに、自覚し（どうやら大物ではなく鈍過ぎるだけのようだった）、急いでクローゼットの全身鏡の前に立つ優。

「……………」

そして改めてマジマジと見ると、そこには驚く声を発したままの形で固まった美少女が映っていた。

長く伸びた艶々の黒髪にキリつとした二重。それでいて鋭い目ではなくクリつとした大きな目。肌はとても綺麗なシミひとつない真っ白な色をしているが、不健康には見えない程度にほんのりと赤く見るからにきめ細かく、スベスベとしている。そして先程、優が驚愕していた男の子には有り得ない物……………そう、それは胸であった。その胸はこれでもか！ と言わんばかりの自己主張の激しい豊かな双丘がたゆんたゆんと揺れていた。

「ってこんな大きな胸してたらバランス崩すな……………ははは……………」

半ば呆れつつ、冷静に今までバランスを取れなかった、大きな要

因に気が付いた。文字通り“大きな”である。今までになかった大容量の胸がいきなり付いていたら誰しも、平行感覚が崩れるであろう。自然と前のめりになり、これまでは身体が無意識にバランスを取っていたが、無意識の許容範囲を越えている為に、そのまま前方へと倒れてしまうのだった。

そして今、この光景だけを第三者に見せて、その感想を一言で表すとするならば、まさに「容姿端麗」の一言に尽きるだろう。

「嘘……だろ？ って嘘じゃないんだよなこれ。……よし！ 確認の為にツネろっ」

今までベットから落ちたり、階段から転げ落ちて、散々痛い目を見ていたのにも係わらず、すがりつくような思いで両頬を思いつきりツネる。

するとどうだろう。鏡の中の美少女は苦痛に顔を歪め、今にも泣き出しそうな顔をする。

「いたーっ！ ……ってそりゃそうか……」

どう考えても自滅行為を行う優であった。

そして美少女を観察していて、ふとあることに気が付く。

「んっ？ よく見ると俺のど真ん中ストライクで好きな顔してるな……？」

優は今の自分の姿がかなり自分の好きな姿であることに今更ながら気付いた。

「……ってそんなことより、取り敢えずあのクソ親父の奴とっちめ

「やる！」

メモを破り捨てようとした優だが、メモの裏にまだ何か書いてあることに目を止める。

「なんだ？ まだ何か書いてあるな……」

「追伸、今の優君の姿は優君が心の中で一番綺麗だと思う女の子の姿になっちゃってます！ やったね優君！ 後、お父さんとママーは研究の為、今日から海外に行っちゃうから凜と二人暮らし頑張っ
てねー！ ちなみに優君の戻し方はわかりまてんっ！ なのでパパーの親友の優君が今日から通う学園の理事長さんにはお話しておいたから安心して女の子のまま通えるよん。戻し方わかったらまた連絡するねー！ ばいびー！」

「なっ！ ふざけるなー！ ばいびー！ ってなんだよ！ っただけ軽い別れの挨拶だよ、あのクソ親父のやつ！」

「……って、それより俺はこの姿のまま通うってのか!？」

そんなことをやっているうちにも、時計の針は刻一刻と進み続けている。

「あーっ！ もう！ とりあえず早く着替えないと」

そそくさと着替えを始めるが、なにぶん女子生徒用の制服など着た事がない為、手間取る優。

「ココがこうで、こっちがこうなって……!」

そしてある一つの疑問に辿り着く。

「下着ってどうすればいいんだっ!？」

「くっ……どうせ今日は入学式だけだし、このままでいいよな？」

女の子になってしまっただけなので、勿論ブラジャーは付いておらず、下はボクサーパンツという変な組み合わせである。仮にこんな姿を他人に見られたとしたら、喜ぶ人が多そうなので、困ったところでもあるが……。

「うう……なんかスカートだからスースーするけど、多分これでいいんだよな？」

鏡の前でクルッと一回りをしてみる。鏡の中の優はスカートをヒラヒラとさせ、とても今日から女の子始めました！ というようには見えなかった。

「はあ……行つてきまーす……って本当に親父とお袋いないのか……」

玄関で通学用の学園指定の革靴を履きながら、両親の不在を改めて実感していた。

「とりあえず悩んでも仕方無いし、遅刻しないように学園に行かないとな……」

入学式への期待と自分が女の子になってしまった不安を胸に学園への道のりをひた走る優。

はあ……大変な事になったな。

そんな優の様子を、物陰から覗く視線があることに、優は気付いていなかった……。

第1話『す、すごくおっきいです』（前書き）

この物語はフィクションです。

実在する、人物、団体、固有名詞、名称、地名には一切関係ありません。

又、誤字、脱字を発見していただけたら、報告していただくとありがたいです。

第1話『す、すごくおつきいです』

私立天雲学園

この学園が今日から優の通う学園だ。

日本1のグループ会社である、天雲グループの学園であり、幼稚園から大学までである。総生徒数は4000人を越え、学園の総敷地面積は琵琶湖2つ分もあり、天雲グループ傘下のコンビニやレストランは勿論のこと、スーパーにショッピングモール、住宅やタワーマンション、はたまた天雲鉄道の駅までもが学園内にあり、その為学園の敷地内はさながら1つの街であるかようになっていた。

本年創立20年目と、かなり歴史の浅い学園だが、日本政府より近未来型教育のモデル校に指定されており、教育は独自のスタイルを採用し、時代の最先端に行く最新の教育設備や、特待生制度（学業成績優秀者やアイドル、スポーツ成績優秀者の学費全額免除）等も超人気校としての拍車をかけている。

主に家柄の高い者や名だたる有力企業の子息、令嬢、芸能人などが通う学園である。

優の家庭は研究者の両親とそれに姉のごく普通の一般家庭であり、格段家柄が高い訳でもなく、はたまた会社を経営している訳でもない。

なぜ優がこのような学園に通う事になったかという点、父、聡の唯一無二の親友が天雲学園の理事長であり天雲グループの社長でもある『天雲 京』（アマクモ キョウ）が多いに関係しているのと言うまでもないだろう。

今まで優の一家は両親の仕事の都合上、日本各地を転々としていた。

そして天雲学園のあるこの三谷市ミタニシに来たのも、優が幼稚園を卒園して以来だろう。優はそれまでこの三谷市で生まれ育った。天雲学園の幼稚園に通っていたが、優の幼稚園卒園と同時に両親の赴任が決まり、まだ幼い優と凜は両親に付いていくこととなった。

その後も日本各地を転々とし、高校一年生となったこの春、三谷市へと帰ってきたのだった。

「うわーなんか懐かしい景色だなー！」

生まれ故郷の景色を眺めながら学園へと走る優。優の家は天雲学園の敷地内にある、住宅街の一角にある一軒家だった。この一軒家は優の両親が結婚した時に建てた物で、建てたはいいが、日本各地を転々としていた為に、数年程しか住んでいなかったのである。

「……………はあはあ……………やっと着いた……………よし！　ギリギリセーフだ」

息を切らせながら校門へと駆け込んだ優。時刻は8時27分と遅刻間際の時間帯だった為か、校門周辺の人影は既に疎らだった。

そのままロビーへと向かい歩いていた所へ

「ちょっとそこのあなた」

優の背中へと掛けられる声。

だが優はその声に気付いていない。

「うわっ！ 銅像だー懐かしいなー！ この理事長の銅像とかによくイタズラしたっけなー」

そんな幼い頃の楽しかった思い出を振り返りつつ、スタスタと口ビーへ向かう。

その優の背中へ、今度は少々苛ついた高圧的な声音でまたも声がかげられる。

「ちよつと！ そのあなた！ 聞こえていますでしよう？ こちらへ来なさい」

その声によつとこさが気が付いた優は歩みを止め、声の主の方へ向かって振り返る。

するとそこには1人のモデルのようなスタイルをした女生徒が立っていた。

流れるような金髪のゆるふわな内巻きの髪型に、キリツとした鋭い碧眼。ほわほわとした可愛い髪型とそのキリツとした顔付きのギャップはもの見事に“ギャップ萌え”というものを引き出していた。（その本人に自覚はないが）

「…………えつと、俺に何か用ですか？」

「俺…………？ まあいいわ。あなた新入生でしょう？」

全く何なのかしらこの子。私が声を掛けても直ぐに気付いてなかったみたいだし、それに自分の事を『俺』って呼んでいたわね。ちよびり変わった子なのかしら？

知らぬ間に彼女の中で、変わり者のレッテルを貼られていた優であった。

「は、はい。そうですけど……」
「そう。ならついでいらっしやい」

そう言つと彼女は優に背を向け歩き始めてしまった。そのモデルウォーキングのような“可憐”な歩き方に見蕩れる優。

「ほら。何をしているの？ 早く来なさい」

「あつ！ は、はい！」

そんな背中をそそくさと追いついて行く優であった。

時を同じくして天雲学園理事長室

「ふむ……。聡の所の優君か。早く会いたいなー！ ちつさな時なんて一緒にキャッチボールとかして遊んだし、今じゃそんな優も高校生かー。さぞイケメンになっちゃってるのかな？」

部屋の広さは40畳程はあろうかという、大きな部屋の主『天雲京』（アマクモキヨウ）は立派な椅子に座ったり、立ったりと、ソワソワと落ち着かない様子であった。普段の彼を知っている者が見たら、きつと目を疑うことであろう。

「あつ！ そうだそうだ！」

何かを思い出したかのように椅子から立ち上がり、『理事長』と

書かれたプレートの置かれた机に向かって歩き出す。

その机の上に置かれているのは古ぼけた写真と2通の封筒だった。その手紙の差出人は優の父、聡だった。

1通の封筒は既に開封されていた。その中身は古ぼけた写真だった。

古ぼけた写真には仲良さそうに手を繋いだ少年と少女が写っていた。

「もうあの約束をしてから10年か……」

その写真の裏にはこのような文が書かれていた。

『 10年後、優と美結を許嫁として再開させる 』

それは聡と京が交わした1つの約束を記した物だった。

「今日は記念すべき日となるだろう！ ハッハッハ！」

そう呟きながらもう1枚の未開封の封筒へと手を伸ばす。

こちらの封筒も差出人は聡だが、この封筒は今朝5時前に、聡、本人が直接、天雲邸へと持ってきた物だった。その為、聡から手紙を受け取っていたのは天雲家の使用人であり、京は先程使用人からこの手紙を受け取っていた。

封を開け、手紙を読み進める京。その手紙には……このような事が書かれていた。

「京久しぶり！ そしてすまん！ 約束守れなくなっちゃった。てへっ！ 優に無許可で試験薬の実験したら失敗しちゃって優くん女の子になっちゃったわー。それと優に伝えて欲しい事があるんだ。その試験薬の事と優におきた変化は一切口外してはならないって。」

実はまだその試験薬の存在は秘密なんだ。だってこれから先、まだ優にどんな変化が起こるか、僕にもわかんないんだよねーははは！死んだりほしくないから安心していいよー。あ！後、京もこれ秘密にしてね？美結ちゃんと明日香さんには言っていないけど、それ以上はダメ、絶対。それじゃー僕とマミーは解決方法探すために外国行ってくるね！優と凜よろしく頼むね。それじゃあばいびー！」

口をワナワナさせながら、微動だにしない京。その目尻には涙が溜まっているように見える。

「あの馬鹿！うちの娘の婿になんつーことしてくれてんだあああああー！」

その京の叫び声は校舎中に響き、後に『理事長ご乱心事件』と呼ばれたとか呼ばれなかったとか。

所変わって

この人、俺のことどこまで連れていくんだ？

優は金髪の女生徒の後に付いて歩いてきた。そして歩いていて気付いたことがあった。それは会う生徒、会う生徒が口々に金髪の女生徒へ向かって

「おはようございます芹副会長」

「おはようございます芹さん」
「副会長おはようございます」
「おはよー芹さん。お仕事頑張つてね！」
「うおー！ 芹様！ 今日も相変わらずお綺麗ですね！ 付き合つて下さい」
「おいそのクス！ 抜け駆けは許さねえぞ！ 芹さん！ 俺と付き合いますよー！」

と言った具合で、そこかしこから声が掛けられていた。その声に金髪の女性徒は1っ1っ丁寧（？）……

「おはようございます」

「おはようございます。ありがとうございます。頑張りますよ」

「おはようございます。腐れ死んだらどうかしら？」

と、返事していた。

どうやら金髪の女性徒は学園の副会長のようだった。

そんな事を考えながらうつつむきつつ、歩いていた優は前を歩いていた副会長が止まったことに気付かず、ぶつかってしまった。

“ポニユ” という音が聞こえそうなくらい柔らかい何かに優の顔が埋もれていた。

副会長は目的の場所に着いた為、歩みを止め、後ろへと振り返つたその瞬間、優がうつつむきながら歩いて来ていた。優はそのまま副会長の“豊かな胸”へとぶつかっていた。

「……何をしているのかしらあなた」

「え？ …… ってうわあ！ ご、ごめんなさい！ ちょっと考え事してたら……」

「……まあいいです。ではこちらで受付を行つて下さい。それと、申し遅れました。私は天雲学園、学生統率自治会副会長、芹・

セリ・アーシュラ・カレン
U・可憐と申します。これからも同じ1年生としてよろしく願います。」

「あ、俺は宮永 優っていいいます。……って同じ1年生!？」

「ええ。そうですね? 何か腑に落ちない点でも?」

あら。また俺って言うてるわねこの子。男の子みたいで面白いわ……ふふつ。

そんな彼女 可憐の中で今度は面白い子扱いされる優であった。

「い、いえ! あの……芹さんも1年生なんですよ。今日入学式なのに、えーっと学生統率自治会でしたっけ? その副会長なんですか? なんかおかしい気がするんですけど?」

「それは後々にご説明致しますので、先に受付をして下さいませんか? 時間も差し迫っていますので」

なんかこの人の喋り方怖い……。心の中でそんなことを思いつつ、自分が連れてこられた場所が何処なのか確認しようと、辺りを見回す。

するとどうやら事務室の受付に連れてこられたようだった。

「あ、はい分かりました」

そんなやり取りをしていると、受付の奥の方から事務員さんが名簿を持ってやって来た。

「こちらに名前の記入して下さい」

「はい」

名前の記入を済ませ、事務員さんから入学式の説明を受ける優。

「入学式は9時30分から始まりますので、9時20分迄には講堂へとお入り下さい。後の細かい流れはこちらのプログラムで確認して下さい」

「分かりました、ありがとうございます」

無事受付を済ませた優は、横に立つ可憐へと話掛ける。

「それでさっきの話なんだけど……」

「あら、宮永さん。私にここまで連れてきてもらってありがとうございますの一言もないんですか？ 私落ち込んだじゃいますよ？ いいえ、やっぱり怒りますよ？」

「……ありがとうございます、ごめんなさい」

駄目だ。俺、この人苦手だし怖い。それに絶対ドSだ。……そんなことを思った優に対して。

面白いわねこの子。こんな可愛い見た目なのに、喋り方はまるで男の子。それにイジっていて楽しいわ。これからも事あるごとに、いちゃもんを付けるしかないわね。……と言う感じで可憐は今後、優のことをイジろうと決めていた。否、ストレス発散の的にしようとしていた。

「あのーそれで教えてもらってもいいかな？」

「そうね……。教えてあげたいのは山々なのだけれど、もう9時15分よ。講堂へ向かいましょうか。その後ゆっくりと丁寧に教えて差し上げますよ」

その一言を残し、可憐は歩いて行ってしまふ。

優はそんな背中を納得いかないような表情で付いて行くのだった。

そしてその優の背後に、優が自宅を出てから、ずっと付いてくる人影があることに、優は未だに気付かないでいた……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0629ba/>

女の子の俺は俺で！？

2012年1月3日01時11分発行